

第一期。出生より三歳。此時期は、感覺時期といつてよい。プライエル氏によると、生後第十七週目には味覺が現はれ、二歳の初めには物音を愛するといふ。又、周囲の支配を受ける時期で、盛んに他を模倣する。従つて此時期の遊戯は、感覺練習を主とし、把握と保持は彼等の最も好む所で、模倣運動と他日組織立つた運動を構成する歩行匍匐等の如き種類の遊戯とが最も多い。

第二期。三歳より十歳。此時期は、想像作用の最活潑な時で、且つ利己的な時代である。利己的で競争を好み、抵抗自是、残忍は此時期の特色で、又、英雄を崇拜する。従つて此時期の遊戯の特色は、初期には玩具を好み、長ずるに従つて戦争遊戯、旗取り、圓陣遊戯、演劇的の所作を好み、鬼事遊戯、迷藏、打棒運動を以て其典型的のものとする。前期の遊戯の特徴を感覺的とすれば、此期のは正に競争的のものである。

第三期。十歳より十五歳。此期の初めには、動物の愛好、植物の移植栽培などが最も目立つてゐる。又、權勢の慾が強く、末期に近づくに従つて社會心が漸く萌し、前期に一番自我的であつたのが、驚く程柔順になり、よく團體に服従し、忠

實は其特色ともいはれる程になる。此頃好んでなす遊戯及競技は、動植物の愛好、砂掘り、粘土細工及駆走と團體的競技とである。團體的競技は、第四期の初めに最も盛んである。實に動植物の愛好、土掘りは此期の生命である。

第四期。十五歳以後。此期の初めには、自我の觀念が漸く強くなり、意志が強くなるに従つて名譽心も亦強く、社會心、團體的精神が發達して來る。後期は所謂青春期となり、知的方面に於ては、價値利害の觀念が發達し、周到なる思慮を以て組織的に事をなさうとするに至り、情的方面に於ては、即ち自己擴張ともいふべき純粹の愛他心が發達し、眞の意味に於ける道德心、宗教心が生じ、身體も精神も不安定になつて、丁度五六月の新緑を眺める感がある。従つて遊戯も前期とは趣を異にし、此の初めには社會的競技を主とするので、擊劍、柔道の如き武技、ベイスボール、テニスの如き組織的の遊戯が行はれる。後期には、將棋、圍碁、短艇、弓術、射撃の如き組織的で綿密な知識を要するものを好む。組織的遊戯は實に此期の特色である。

遊戯の時期と約説原理 兒童期に於ける遊戯は、略ぼ上述の如き段階を経る。

さて此特色と、反復説のいふが如き人類發達の段階とは、如何なる關係を有するかは、次に述べる通りである。

ホール氏の反復説に、他の學者が種々研究追加して、遊戯の特色と人類發達の段階とを次の如き表に作つてゐる。

(人類進化の時代別)

(是に相當する兒童の遊戯)

(一) 動物時代

一、模倣的遊戯

二、攀登的運動

三、振搖運動

四、垂下運動

五、水盤運動

一、狩獵的遊戯

二、鬼事遊戯

三、迷藏

四、標的に關する遊戯

五、打棒運動(クリケット)

(二) 野蠻時代

(三) 遊牧時代

一、動植物の愛好

二、駢走

三、團圓に關する遊戯

一、人形

二、造庭

三、砂掘り

四、粘土細工

一、團體競技

(四) 農業時代

族長時代

初期部落時代

(五) 種族生活

さて人類が原始時代から今日までに經來つた經濟生活攝食中心生活は、略ぼ上記の通りで、學者間に大した議論はない。第一期動物時代は、人類が個體としての發達を遂げた時代で、遊戯の第一期即ち感覺時期に相當する。次に第二期野蠻時代は、人類が食を得るために山野を跋渉して狩獵をなした時代で、遊戯の第二期に於て、競争的色彩を帯び、鬼事遊戯を中心にしてゐるのは、此期の反復である。次に第三期から第四期までは、人類が自然のまゝに生育した食物に満足せず自ら牧畜をなし、進んでは耕作に従ひ、漸く固著生活に入つた時期で、遊戯の第

三期、即ち動植物の愛好土掘り・征戰競技をなす時に相當する。最後に第五期に入つて、人類は、國家の如き種族生活をなすやうになり、商工期に入つて科學を應用するに至つた今日の時期は、遊戯第四期に於て組織的遊戯をなし、智略を要する時に相當する。かくて兒童は壯年期にはひるのである。以上の事は、兒童の實際を觀察研究し、人類學生物學に於ける研究と對照すれば明かになると思ふ。

結論 ホール氏の反復説は、大體に於て兒童發達の段階及遊戯の發達と並行してゐる。教育界に於ては、一部に尙ほ何等遊戯の本質を研討することなく、徒らに自己の嗜好のみを以て教材を選択し、若くは唯だ教案的に作つた所の主義も定見もない營利的書籍に頼つてゐるものがある。實際は必ず理論を有しなければならぬ。教育に應用せんとする者は、よく此間の消息を研究して、根據ある教育を施して貰ひたいものである。

第二 兒童の感ずる賞罰

緒言 丁度此題目によつて研究材料を集めてから數ヶ月にして、小學校に於ける懲罰論や掃除論が、或動機から盛んに論議されたのである。

けれども他の職務のために、此研究結果の發表ものびのびになつて漸く體罰論の下火となつた今日、發表の運びとなつた。

然し體罰の可否については漸次に述べることにして、とにかく體罰なり或は他の懲罰なりが、現に教育上行はれ來た以上、之に就ての研究を發表するのも徒勞でないと思ふのである。

そこで一般に賞罰の可否が云爲されるについては、其論がたとひ賛成説であらうが、不賛成説であらうが、すべて論には確實なる立脚點を有すべきであらうと思ふ。若し只論者の想像に過ぎないならば採るに足らないのである。此に余は此研究の目的として、本研究は體罰可とか、懲罰無用とかを賛否することを企圖してゐるのでないといふことを明言して置く。何となれば此研究は兒童に賞罰を必

要とするといふ假定の下に行はれたのであつて、児童が賞罰を如何に感ずるかといふことは、賞罰を教育上に應用する際の参考にはなるが、直接に無有用如何を決するものでないからである。かく賞罰を必要とするといふ假定を有するのであるから、此研究より將來する所のものは、教育上に賞罰を應用するには如何にすべきかといふことで、其要不要説には間接に關係するだけである。

さて賞罰を必要とする立脚點にあるとして、今までは只大人の自ら賞罰に對して感ずるところを以て児童も亦左様に感ずるだらうといふ想像で行つたやうに思ふ。然し児童研究發達の結果は、矢張賞罰を教育に應用するならば、それに對する児童の感じを研究して其上に行ふといふことを教へる。予はこゝに本研究の必要を感ずるのである。

此種の研究をした人は決して無いではないが極少いと思ふ。パルンス氏の如きは七歳から十六歳に至るまでの児童四千人につき、児童の罰を受けた際如何に感ずるかを研究した。其詳細は氏の論文「児童の見たる罰の研究」にあるが、しかし氏は罰のみに就て研究したのである。又氏は外國児童に就てなしたのであるから、

人情・風俗等を異にする國のを、直ちに我が國に應用し得るか否かは疑問であつて只参考にとむべきであるかも知れぬ。此に於て更に我が國の児童につき、賞と罰とに涉つて研究すべき必要を認める。

研究方法 研究方法としては次の如き六問を發して直接に各児童の答案をもとめた。其際注意したことは、児童を一席一人として互の談話傍見を禁じたことである。これ他児童の答案を模倣するを防ぐ爲である。それから答案を求めるとき、児童に向つては具體的説明を避けた。例へば第一問の「一番いやな罰は何か」といふ説明に於て、「打たれることか」「叱られることか」等のやうな説明的質問を避けた如きである。これ暗示となつて児童の觀念を束縛するを恐れたからである。又無記名で答へさせた。

第一問 自分が一番いやな恐ろしい罰をあげよ。

第二問 褒められるのと賞品を戴くとはどちらが好きか。賞品が好きなら何が
いゝか。

第三問 罰するのは何のためか。

第四問 賞するのは何のためか。
 第五問 人が罰せられてゐるのを見ると何う考へるか。
 第六問 人が賞せられてゐるのを見ると何う思ふか。
 以上の方法により、尋常五年から高等三年まで百二十二名、年齢十一歳から十六歳まで、男児六十七名、女児五十五名について行つた実験により、研究結果を發表しよう。

研究結果 表中人員數と答案件數と同一でないのは、一人で數答をなした者があるからである。今其結果を表示しよう。

種類	人員數	第一問より順次に表示す			
		高三男 年齢一五三	高二男 一四四	高一女 一三二	高一男 一三〇
一、父母を呼出して叱責する	二	二	六	二	一
二、他の生徒の前にて叱責する	二	二	二	二	二
三、退學を命ずる	六	二	二	二	二
四、詰責する	二	二	二	二	二
種別	合計	一〇	一六	一〇	一〇

第一問件數合計	第二問件數合計	第三問件數合計	第一問より順次に表示す							
			一、褒辭	二、書籍	三、文具類	四、賞品	五、金錢	六、袴	七、傘	
一四	二一	二二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一四	一五	一八	〇	〇	一	三	四	二	五	〇
一四	二一	一三	〇	〇	〇	〇	二	〇	〇	〇
二八	三七	三〇	〇	〇	六	二	二	八	九	一
四三	三三	四二	〇	一	一	〇	一	〇	二	〇
第一問件數合計	第二問件數合計	第三問件數合計	一	二	三	四	五	六	七	八

第四問件 數合計	第一問件 數合計	第二問件 數合計	第三問件 數合計	第四問件 數合計	第五問件 數合計	第六問件 數合計
一、改善のため 二、報償として 三、其人を獎勵のため 四、皆を獎勵のため	一、奮發する 二、自分も嬉しい 三、羨望する 四、不勉強を後悔する 五、嫉視 六、感心する	一、同情する 二、當然と思ふ 三、先生に感謝する 四、自ら反省する 五、恐怖を感じる 六、忠告してやらうと思ふ 七、先生をひどい人と思ふ	一、叱責を見るに、全體を通じて叱責は體罰よりも有効ではないかと思はれる。叱責を見ると父母と立合の上叱責されるのが一番嫌と見える。次に生徒一同の面前で叱られるのを恐れる傾がある。とにかく下級より上級を通じて體罰により感覺的苦痛を與へられるよりも、公然と羞耻心に訴	一、奮發する 二、自分も嬉しい 三、羨望する 四、不勉強を後悔する 五、嫉視 六、感心する	一、同情する 二、當然と思ふ 三、先生に感謝する 四、自ら反省する 五、恐怖を感じる 六、忠告してやらうと思ふ 七、先生をひどい人と思ふ	一、奮發する 二、自分も嬉しい 三、羨望する 四、不勉強を後悔する 五、嫉視 六、感心する
一九四四一	一八	一三	一四	一四	一四	一四
〇〇六八	一七	一四	一四	一四	一四	一四
〇〇二二	一四	一四	一四	一四	一四	一四
一五九	一七	一四	一四	一四	一四	一四
〇四〇	一五	一四	一四	一四	一四	一四

右の表に於て説明して置かねばならぬことは、事例の數だけあげて縦横の百分比を出してゐないことである。これかゝる研究に於ては、數學的にあまり正確に出しても別に効果はないのであつて、一見して事例の數で其大體が知ればよいのである。だから此にはそれを略した。次に第一問の部に詰責と叱責を分けたのは、前者は理論的に問ひつめられるので、後者は理由を説かずして叱りつけられることを意味する。又第一問第六から前のは懲罰で、第七からは體罰の條例である。また第二問の一は褒辭で、二以下のは賞品を意味する。且又第四として賞品を特に置いたのは、品物の名をあげなかつたものを集めたからである。更に第四問で改善と獎勵とを分けたのは、消極と積極とを分けたのである。以下順次に表につき研究しよう。

結論 先づ兒童の最も恐れる罰の方法を見るに、全體を通じて叱責は體罰よりも有効ではないかと思はれる。叱責を見ると父母と立合の上叱責されるのが一番嫌と見える。次に生徒一同の面前で叱られるのを恐れる傾がある。とにかく下級より上級を通じて體罰により感覺的苦痛を與へられるよりも、公然と羞耻心に訴

へられる叱責が一番兒童に恐れられてゐる。而して父母の面前に於てやられる方とは、其嫌はれ方が年齢の進むに従て異なる。即ち上級になる程一般の面前でやられる方を嫌ふ様になつてゐる。依つて此に於て注目すべきことは次の二點である。

第一 感覺的苦痛よりも精神的苦痛を恐れる。

第二 年齢の進むに従つて、父母よりも一般の面前に於ける叱責を忌む。

次に第二問につき兒童の最も喜ぶ賞め方を見るに、上級にあつては賞品よりも褒辭を以て満足し、下級になるに従つて次第に物質的満足を喜ぶやうに見える。勿論上級になれば稍虚飾があるが、而し無記名により幾分是を防ぎ得たと思ふ。たとひ防ぎ得なかつたとするも、全事例すべて虚偽なりといふことは出来ない。また下級になると金錢などを欲しいと書いてゐる。而して物質的賞與に於て彼等の喜ぶものは、矢張彼等の日用具たる文具書籍にある。そこでまとめて言ふと、

第一 年齢下るに従つて物質的満足を喜び、長くるに従ひ精神的満足を喜ぶ。

第二 賞品としては彼等の親熟した所の文具學校用品を好む。

第三問につき兒童は罰の目的を如何に解するかを研究するに、次のと同様年齢下るに従つて之を報復と解し、年齢長くるに従つて惡事を矯正して其人又は全體をして其善行を獎勵行させるものであると解するに至る。

即ち、下級にあつては報復と解し、上級にあつては矯正又は善行獎勵のためと解する。

次に第四問につき兒童は何故に賞を受くるかといふに對して、彼等は下級にあつては只善行に對する報酬と見るけれども、年齢長くるに従つて改善獎勵のためなることを解する。しかも比較的早くから賞の目的のあるところを知つてゐるやうである。要するに、

第一 下級にあつては賞を報酬と見、上級に進むに従つて改善獎勵のためなりと解する。

第二 賞の目的を解することは比較的早い。

次に第五問につき他人の罰せられてゐるのを見て兒童は如何に感ずるかを見るに、甚だ興味ある結果を得た。

即ちこれを見て同情を感じずるものは全體を通じて最も多かつたことである。これ反面に酷罰は彼等同輩の反感をかふものなることを意味してゐる。又之と同時に、之を當然と思ふものも全體に多いけれども、之は比較的上級に其數を増してゐる。これ年齢の進むに従つて、嫌な友人には他から制裁の下るのを喜ぶといふ一種の感情が少年少女期の終から青春期にかけて益々強くならうとしてゐるのではないかと思はれる。此感情は、悪い生徒が懲罰されてゐるのを見ると好い氣持だと思ふ残忍な感情であつて、他人の苦を見て自ら反省する情とはやゝ異つてゐる。次に面白い現象は自己反省が全體を通じて多く、而も上下級に差別のないこと、恐怖を感じるのは下級のみに限られてゐることである。若し懲罰に恐怖を伴はないならば、下級生に於ける其効果は極めて薄くはなからうかと思はれる。約言すれば、

- 第一 他人の懲罰されてゐるのを見ては、同情する兒童が最も多い。
- 第二 當然だと思ふものは上級に多く、恐怖を感じずるものは下級に限られる。
- 第三 他人の罰せられるのを以て、自己反省をなす者は全體を通じて相當にあ

る。然し同情するもの程多くならう。

更に第六問によつて此度は反對に賞を如何思ふかについて研究して見ると、賞を見て自分も貰はうと奮發する者は下級より上級を通じて最も多く、平均六〇%を占めてゐる。之を見て美望する者は、尋五が五五%、高一男二四%、同女四〇%、高二高三が夫々二一及一七%である。これによつて下級及び女子に美望する者の多いことがわかる。女子は男子に比し美望の率が高く奮發が低い。これは常識でもさもあるべしと察せられる。又嫉視する者もある。要するに、

- 第一 奮發心を起すものは全體を通じて最も多い。
- 第二 美望するものは下級及び女子に多い。
- 第三 嫉視する者も幾分ある。

以上の如き結論を下したが、さて斯る實驗は、只實驗の數字のみに依頼するときは、其不完全なるもの程結果が實際と全くかけ離れたものになつてしまふ。故に余り數字に拘泥せずに、其大體に着眼しなければならぬ。次に此結論に立つて更に教育上の應用を説かうと思ふ。

應用 上記の如く研究の結果として予は個條にして十三ばかりの結論を得た。さて此結論を實際教育上に如何に應用すべきか。これ本節の主眼である。

第一問の結論よりして、若し訓育上の手段として罰を用ひるならば、感覺的苦痛に訴へるものよりも、精神的苦痛に訴へる方が有効である。これは上級に進むに従つて益々さやうである。而して始は家庭と連絡して其惡傾向を防ぎ、年齢を積んで青年期に近づけば、も早や父母をそれ程恐れぬやうになり、且また同時に教師をも憚らぬやうになるから、其時は一般の面前に於てする方が最も彼等の羞恥心を刺戟するものである。

此度は賞する場合にあつても、前記と同様の結論を得てゐる。即ち罰する時は羞恥心に訴へるのが有効であつたが、賞する場合に於ても亦精神的満足を喜ぶやうに年齢と共に向つてくる。故に尋常五年及び六年位までは賞品を與へる方が効果がある。それには學校用品が實用上からも又彼等の好みからもよいことだと思ふ。さて精神的満足を賞與の終局とするならば、物質的満足から精神的満足に移らしめる方法としては、なるべく極端に物質的でない方がよいと思ふ。それには

全校生徒の面前に於て名譽を表彰するため、特別なるメダルの如きを與へるのも一方法であらう。それに就ては豫めメダルの價值をつけて置く必要があるので、なるべく濫與しないとか、児童のそれに對する尊敬を集めて置くとかが必要である。

以上二問の結論は、賞罰を行ふにつき其方法を示すのであるが、次の四問の結論は、賞罰が果して有効であるか、教育に應用するにつき何程まで有効であり得るかを判断する材料にもなるものである。

第三問第四問とも其結論は相等しい。即ち児童は下級にあつては賞罰を報償報復と感ずるが、漸く進むに従つてそれは矯正改善獎勵など、他の目的に對する手段であることを解するやうになる。此點より見るときは、賞罰の目的は無論兒童に解されるけれども、兒童に正しく解せられたからとて教育上に應用して果して良果を得るとはいはれない。何となれば少しく熟した児童は、此裏をかいて虚飾せんとも限らないからである。

第五問第六問は賞罰の有効に行はれてゐるのを知るに足るものであつて、又問

接に教育上に用ひてよいものであるか否かを推知する材料である。他人が罰せられるのを見て、自分では悪いことをするまいと反省するものは随分多いやうである。又賞せられるのを見て奮發心を起すのも随分多い。だから賞罰は決して全然無價値とは言はれない、相當に成績を收めてゐると見なければならぬ。然し此に注意すべきは、他人の罰せられるのを見て同情するものが非常に多い、恐怖するものは下級に限られてゐる、又賞せられるのを見て羨望するものが多い、嫉視するものもあるといふことである。賞罰に伴ふ是等の感情は、最も注目すべきものと思ふ。かゝる同情は時に教師に對する反感を抱かしめる。而も此感情は年齢の進むに従つて多くなる。想ふに中學生の教員排斥はかゝる内面を有してゐることも随分あらう。それから恐怖する結果は、隱蔽卑屈等の惡徳を助長するものとなる。次に嫉視は友情を傷け、羨望は虚飾竊盜等に移行する恐れがある。

此に於て賞罰を行ふた結果、此に二つの相反した所の感情を生徒に養ふことになる。即ち一方には善行の獎勵、惡行の矯正及び禁止となるが、他方には反感の惹起、卑屈及び虚飾等の助長之である。此點の解決は教育上に行はれてゐる賞罰とい

ふ手段の死活問題に觸れると思ふ。

此解決に先つて賞罰を全然不要とするトルストイ氏の意見の如きを考へるに、これには二論據を有する。一は前記の賞罰の將來する悪い方面を盾にとつてゐること、他は教師の腕前がよければ必要はないといふのである。そこで若し賞罰を必要とするならば此二論據を破ればよい譯である。故に今第一論據を見るに、賞罰には悪い結果ばかりでなくて善い結果もある。且此惡結果を防ぎ得たならば賞罰必しも排すべきでなからうと思ふ。今其防ぎ方につき考究せんに、反感を起すと否とは、懲罰の程度教師の態度の如何にあるのであるから、そこを注意すればよい。又恐怖の情は少しは起らしめた方が罰の効果は擧るものである。それで過度に恐怖せしめない限りはいゝので、それについては、矢張其程度と教師の態度との如何が必要である。羨望は之を失望無氣力等消極的感情を起させないで、十分積極的に奮發心を起させるやう訓示模範を以て導くことが出来る。例へば先づ甲を賞し、其次に奮發した乙を賞して、以て多くの生徒の奮勵心を刺戟するが如き其一法である。次に普通一時的の嫉視は多くは日數を経れば消滅する。只消

滅しないのは、教師が甲生徒のみを常に賞し、乙生徒は常に之を貶するやうな神經質的の取扱に胚胎したものである。

次に第二論據を見るに、教師の腕前さへよければ賞罰は用ひずとも訓育はあげ得るといふことであるが、トルストイ氏にして始めて賞罰を要せずして効果を収め得たので、これは寧ろ變則である。今のところ教師悉く優越なる腕前を有するものばかりではないから、一般にトルストイ氏の言の如く出来るものではない。然しかく言へばとて賞罰萬能を唱へるのではない。賞罰は手段であつてなるべく他に良法を求むべきである。此に於て吾々は教育上今のところでは賞罰を必要と認める。否、研究の結果より見るときは少くとも必要とせねばならぬ。且體罰の如きも教師の人格に保證あり信念あらば、全然不必要ではない。論ずべきは只教師の態度の問題、つまり其人格如何の問題であらうと思ふ。

児童學概論終

索引

第一 一般索引

- 愛異性の 二二〇 — 骨肉の 二二二
- 愛他心 二七九
- 愛の感情 二八〇
- 握力計 三九・三三七
- 握力の測定 三九
- 脚の形態の變化 一四七
- の周圍の發育 一四九
- 歴點 二二九
- アミーバ 二・八三
- アルコホルismus 一六四
- 鞍狀頭 一六七
- アンソロポメーター 三九
- アンチケフトキシシ 三三三
- イ、キ
- 胃—初生兒の 一五八 —の
- 發育 一五八 —の程度 一五八
- 英吉利病 一六六
- 意志 一〇二 —兒童の 二八九 —と習慣 二九二
- 意志的記憶の發生 九九
- 意志作用の發生 一〇一
- 意志薄弱 二九六
- 異常兒童 三一 —の減滅 三二九
- 一時性性格異常 三二九
- 位置排列期 二八八
- 一般感覺 二三四
- 遺傳 一〇三 —獲得性の 一〇六 —畸形の 一二三 —氣質の 一二六 —形態の特徵の 一二二 —個性の 一二七 —個體的特質の 一二二 —疾病の 一二三 —種族の特質の 一二一 —神經病の 一二一
- 四 —心理的特性の 一一
- 五 —精神能力の 一二七 —精神病の 一二四 —性能の 一一五 —生理的特徴の 一一五 —病的特徴の 一一三
- 遺傳性白内障 一一三
- 遺傳的運動失調 一一四
- 遺傳病 一六四
- 因果説 九六
- 飲酒不堪 三二二
- 印象の性能 一一六
- 印象法 四一・四二
- 明頭實扶的里 一七八
- マンフルエンザ 一七九
- ウ、ヴ
- 臨—の形態の變化 一四七
- の周圍の發育 一四九
- 運動型 一一七・二五四
- 運動質 八六
- エ、エ
- 永久齒 一四二
- 英國の児童學 六八
- 嬰兒期 一二
- 嬰兒—の身長 一三五 —の體重 一三八 —の本能 一九四
- 營養障礙 一四八・一六九
- 營養本能 一九二
- 疫癘 一七六
- エステシオメーター 三三六
- X字形—脚の 一六八
- X染色體 一〇四・一〇五
- エルゴグラフ 三三七
- エルゼツァー氏測定法 一四二
- 延髓 一五七
- オ、ヲ
- オイスター氏管 二二二
- 應化 一一九
- 横隔膜式呼吸 一五一
- O字形—の脚 一六八
- 溫覺 一五八・二二九
- 溫點 二二九
- 溫度感覺 二二九
- 三九九

カ、ガ、クワ、グワ

- 回想 二八
- 細蟲 一七四
- 開眼症 一一三
- 概念の意義 二六一
- 發達 二六二
- 外胚葉 九〇
- カワスの法則 四六
- 下外門齒 一四二
- 下顎内門齒 一四二
- 書取法 三三五
- 學校貧血症 一七〇
- 核絲 八八
- 核汁 八六
- 隔世遺傳 一〇六
- 核膜 八六
- 下降式 三四二
- 假作童話 二六〇
- 過多指 一六四
- 過多趾 一六四
- 合指性 一一三
- カリカク家族 七五・一一七

癌

- 一三・一六四
- 感應遺傳 一一五
- 感覺 二三七
- 三五の發達 二二八
- 感覺的好奇 二一七
- 感覺的注意 二四七
- 感官 一五四・一五七
- 病 一七四
- 眼球運動 二二三
- 眼球伸張症 一一三
- 環境と適應 一一九
- 影響 一一一
- 玩具 二一四
- 關係對象の測定 五六
- 觀察 二八
- 觀察法 二九
- 感受性 九七
- 感情と教育 二八九
- 感情型 二五一
- 管狀骨の發生 一四五

間接分裂

- 八九
- 間接法 二九・四一・三三六
- 汗腺 一六一
- 肝臓の發育 一五九
- 眼腺症 一一三
- 陥入 九〇
- 觀念 二四〇
- 觀念型 二五三
- 觀念的注意 二四七
- 觀念聯合 二四二
- 間業 九二

四〇〇

- 器官 九〇
- 九二の發生 九〇
- 器官缺陷 三一
- 戲曲の本能 二〇三
- 氣質的興味 二四九
- 撰入 二五六
- 既成説 八三
- 擬態 一一〇
- 機能的心理學 一九
- 機能の變化 一三二・一八七
- 基本筋 一五〇
- 嗅覺 一五八・二三一
- 休止狀態細胞の八七・八八・八九
- 救助兒 三一
- 急性傳染病 一七六
- 休息 三四八
- 四九の時期 三四八
- の方法 三五一
- 吸乳 一九四
- 休養説 二〇六
- 胸圍—初生兒の 一四〇

の發育 一四〇

- 教育學的測定法 五八
- 教育の必要—人類に 四
- 胸腔の形態の變化 一四七
- 教化制限法 三三〇
- 胸式呼吸 一五一
- 遠視能力 二三三
- 供述 二五一
- 胸腺 一六一
- 鏡宇本能 一九九
- 蟻鼻 一七五
- 強迫觀念 三二五・三二六
- 恐怖 一九五
- 恐怖症 三二五
- 胸部の測定 三八
- 興味 二四九
- 虚言 二五七
- 怯懦 二九六
- 近視眼 一一三
- 筋肉—の重量の増加 一四八
- の發育の不調和 一五〇
- 筋肉運動の發達 一五〇

索引

ク、ゲ

- 偶因論 九六
- 空同知覺 二三七
- 偶然起對説 一九二
- 寓話 二六〇
- 具體的概念 二六二
- 具體的性能 一一六
- 組合則—メンデルの 一一〇
- クリッフォード氏の法則 一三二
- 佻儂病 一四八・一六四・一六六
- 佻儂病性念珠 一六七
- クレチニスムス 一六四
- 群居本能 二二四

ケ、ゲ

- 警戒色 一一〇
- 經驗的恐怖 一九五
- 經濟法 一八七
- 計算法 三三五
- 形象期 二八八
- 繼續聯合 二四三

輕打法 三三八

- 系統發生 四・二二
- 輕度白癩 三一七
- 系列式能力検査法 四一
- 瘰癧 一七四
- 血壓 一五三
- 血液 一五二
- 結核 一六四・一六九・一七二・一七六
- 結果説 二七五
- 缺陷兒 三一一
- 血球 一五二
- 血行器 一五二
- 結合型 二五一
- 結合の性能 一一六
- 結婚制限策 三三〇
- 血色素 一五二
- 血量記号 三三八
- ケノトキシソ 三三三
- 原因説 二七五
- 原香期 二六五
- 幻覺 二三九

幻覺性 二五六

- 原形質 八六
- 言語の發達 二六五
- 言語期 二六六
- 原始的同情 二二六
- 檢觸器 三三六
- 獻身 二二六
- 原生動物 九八
- 權勢慾 一九八
- 原腸期 九〇
- 好奇 二一七
- 公算錯差 四九
- 公算の原理 四六
- 強情 二九四
- 甲狀腺 一四八・一六一
- 後門 一四一
- 構成的心理學 一九
- 構成的想像 二五五
- 口頭式實驗 三四
- 喉頭實扶的里 一七八
- 興奮性痴愚 三一八

四〇一

興奮性白痴 三一六
 腔胞期 九〇
 語言期 二六五
 個體維持本能 一九二・一九三
 個別式能力検査法 四一
 混合型 一一七
 呼吸 一五一
 呼吸器 一五〇
 呼吸器 三三八
 呼吸式 一五一
 呼吸數 一五一
 呼吸調 一五一
 呼吸容量 一五一
 個人的差異 三七
 四〇
 個體發生 四・二二
 骨微毒 一四八
 混合型 二九四
 混合式 三四二
 昏迷狀態 三二三
 猜忌心 二〇一

再生 二四〇
 再生的想像 二五五
 細胞の構造 八六
 割 八九
 細胞核 八六
 細胞質 八六
 細胞膜 八六
 錯覺 二二九
 錯差 四五
 一・五二の分配 四七
 一の法則 四五・四六
 殺害法 三三〇
 三官者 三一七
 算術的平均 四七
 四七の公算差 五〇
 殘忍性 一九八
 シジ、チ
 痔核 一六四
 視覺 二二三
 視學型 一七・二五
 耳下腺炎—流行性 一七六
 齒牙の發生 一四二

兒童 一四三
 時間知覺 二三八
 色覺 二三四・二八五
 色情異常 三二九
 色盲 一三三
 指極 一四七
 見群 二二五
 自己意識の發達 二九八
 思考の意義 二六七
 嗜酒癖 三二三
 視神經 一五六
 姿勢 一六九
 自然淘汰 一九九
 思想—と教育 二七二
 意義 二六七
 思想型 一一七
 執意作用 一〇二・二九一
 除外癖 一六八
 實驗教育學的方法 三九
 實驗材料の處理 四五
 實驗心理學的方法 三七・三九
 實驗法 三三

嫉妬心 二〇一
 疾病 一六四
 一三の原因 一六四
 質問紙法 三四
 兒童 一・三—と成人 四・
 五・六—の意義 一—の
 意志 二八九—の異常
 三一—の遺傳 一〇三
 一の感覺 二二八—の感
 官 一五四—の感情 二
 七四—の觀念 二四〇
 一の疑問 二一八・二七一
 一の思想 二七〇—の宗
 教心 二八〇—の情緒
 二七四—の神經系統 一
 五四—の信仰 二八一
 一の審美心 二八五—の
 疾病 一六四—の睡眠
 三五二—の想像 二五六
 一の知覺 二二八—の道
 徳心 二七八—の發生
 八三—の表象 二四〇

一の疲勞 三三二
 能 一九〇
 四・二八二—の聯合 二四
 三
 兒童齒 二八七
 兒童學 一三
 二—と解剖學
 一—と實驗教育學 二四
 一—と兒童研究 一四
 兒童心理學 一四
 學 二二
 八—と生理學 二〇
 理學 二二
 一八—の起源 六三
 料 四三
 一—の補助科學 一八
 兒童學研究法 二六
 兒童學史 六〇
 兒童學測定法の範圍 四五
 兒童期 一—に教育を要す

る所以 四
 理由 三
 三四—の長さ 三
 範圍 二
 兒童研究 一四
 兒童心理學 一四
 兒童心理學的測定法 五八
 自負心 二二三
 賞扶的里 一七六・一七七
 脂肪過多症 一一三
 社會性 二七八・二七九
 社會的遺傳 二〇四
 社會的本能 一九三・二二三
 從位對象 五六
 習慣 一九一
 宗教心 二八〇
 蒐集本能 二〇〇
 充實期 九
 從順 二九三
 羞恥 二二三

雌雄淘汰 一一〇
 十二指腸蟲 一七六
 習癖 一〇二
 習慣と意志 二九二
 自我性 二七八
 授精 八七
 受精丘 八七
 授精卵の發育 八九
 種族維持本能 一九二・二一八
 出血 一六九
 出血性體質 一六九
 出生 九二
 受動的想像 二五五
 受動的注意 二四六
 狩獵本能 一九八
 循環器 一五二
 順—本能 一一〇・一九二・二
 〇一
 上位對象 五六
 上昇式 三四二
 上外門齒 一四二
 消化器 一五八

孃核 八九
 上顎内門齒 一四二
 松葉腺 一四八
 猩紅熱 一六六・一七六・一七
 七
 粧飾 二二〇
 小門門 一四一
 娘染色體 八九
 情操 二七四
 常態双生兒 九五
 條蟲 一七五
 娘中心體 八九
 情緒 二七四
 二七四—の本質 二七五
 小頭 一六四
 小兒瘰癧病 一四八
 小兒傳染病 一七六
 少年少女期 一二
 賞罰 二七八
 小副染色體 一〇四
 證明 二七〇
 觸覺 二二九・二三〇

觸覺閾 二三〇
 叙述型 二五一
 所動的想像 二五五
 所動的注意 二四六
 初生児の胃 一五八―の感
 官 一五七・一五八―の胸
 廓 一五〇―の身體 九
 四・三五・三七・四〇・
 一五〇―の唾液 一五八
 一の脚髓 一五四―の皮
 膚 一六〇
 初生児紅斑 一六〇
 所有本能 二〇〇
 尻骨盤 一四八
 シルレル・スマンサー説 二〇
 六
 進化 一一九
 神經系統 一五四―の機能
 の發達 一五七―の發生
 九〇
 神經質 一七四・三二四・二九
 七

神經衰弱 三二四
 神經衰弱性性格 三二四
 神經病 一一三・一二四
 衄血 一六九
 信仰―兒童の 二八一
 身心の相關 九六
 新成説 八四
 心臟 一五三
 腎臟 一六一
 人體測定法 三七
 身長―嬰兒の 一三五―初
 生児の 一三五―の増加
 一三五―の測定 三七
 一の發育 一三六
 伸張期 九
 心的對比の原理 一八六
 神童 三一
 審美心 二八五
 神祕的感情 二八〇
 戲門 一四一
 信賴の感情 二八〇
 心理學的測定法 五七

ス、ス、ツ
 髓鞘 一五五・一五六
 髓質 一五四
 腺臟 一五九
 水平式 三四二
 睡眠 三五二―の時間 三
 五二―の深さ 三五三
 睡眠型 三五四
 睡遊状態 三二二・三二三
 推理 二七〇
 趨向 九八
 頭蓋骨―の形態の變化 一四
 六―の發生 一四五
 頭蓋骨 一六七
 ステツメーター 三九
 スピロメーター 三八
 セ、ゼ
 性―の起源 一〇三・一〇五
 一と疾病 一六六
 聲音期 二六五
 生活動質 八八
 成形期 一二

四〇四
 性質純粹期―メンタルの―
 一
 青春期 一一・一二・一五三
 生殖器 一六一
 生殖細胞 八五
 生殖本能 一九三・二二〇
 精神検査の沿革 四〇
 精神高格 三一
 精神障礙 一六四・一七四
 精神生長法 一八七
 精神低格 一七三・二二三
 一三・三三〇
 精神不同 三二九
 精神の分化 九五
 精神薄弱 一一七・三一三
 精神發達法 一八五
 精神病 一一三・二二四
 生存競争 一一九
 精蟲 八五
 精蟲核 八七・八八
 生長 一三二・一八七―精神
 の 一八五―の一般現象

一三三
 成年期 一
 性能 一一五―の種類 一
 一六
 性慾と教育 二二二
 生物學的測定法 五二
 勢力過剩説 二〇五
 ゼームス・ランゲ説 二七五
 脊髓 一四七・一五七・一六四
 脊柱彎曲 一六八
 接近聯合 二四二
 絶對論 九六
 竊盜心 二〇一
 セフプロメーター 三九
 腺 一六〇
 念似双生児 九五
 染色質 八六・八七・八八
 染色體 八九
 選擇の性能 一一六
 先天性微毒 一六九
 腺病 一七〇
 腺病質 一一四・七〇

讀妄状態 三二三
 リ、ゾ
 綜合的想像 二五五
 桑椹期 九〇
 双生児 九五
 想像―と教育 二五八―の
 意義 二五五
 創造的總合の原理 一八六
 創造的想像 二五五
 想像的伴侶 二五七
 想像表象 二四〇
 相對的分拆の原理 一八六
 走動性 九八
 争闘本能 一九八
 側門 一四一
 組織の變化 一三二・一八七
 素質遺傳 一一三
 タ、ダ
 體温 一五二・一五三
 第一小臼齒 一四二
 第一生齒期 一四二
 第一大臼齒 一四三

胎教 一一八
 胎兒の發育 九三
 胎兒期 九・一二
 體重―嬰兒の 一三八―初
 生児の 一三七―の増加
 一三八―の測定 三七
 大門類 一四一
 大頭 一六四
 第二小臼齒 一四二
 第二生齒期 一四二
 第二大臼齒 一四三
 第二の誕生 一一
 大脳皮質 一五四
 對比法 一八九
 大副染色體 一〇四
 第六臼齒 一四三
 單位性―遺傳の 一〇八
 單細胞動物 二三
 單精 二七四
 斷定 二七〇
 チ
 知覺 二三七・二四〇―と教

青 二三九―の錯誤 二
 三八
 痴愚 三一四・三一七
 智商―と能力 一四三
 遲鈍 三一九
 遲鈍性痴愚 三一八
 遲鈍性白痴 三一六
 チフス 一六九
 注意 二四二
 中間錯差 四九
 中間状態 三二八
 中間數量 五四
 注視點 二四六
 抽象的概念 二六二
 中心體 八六・八九
 中數 五四
 中數の化 五六
 中胚葉 九〇
 畫夢 二五七
 聽 一五九
 聽覺 二三二
 四〇五

聽覺型 一一七・二五四
 腸寄生蟲 一六九・一七四
 聽神經 一五六
 直觀的想像 二五五
 直接精神病 一一四
 直接法 二九・三三四
 智力 一〇〇・二二〇 一の進化 一〇〇 一の發生 一〇〇
 智慮消滅説 一九一

ツ
 痛覺 二二九
 痛覺測定器 三三七
 痛點 二二九

テ、デ
 啼泣 一九四
 低能兒 三一
 デイナモメーター 三九・三三
 七
 癲癇 一一四・一七四・三三三
 癲癇性性格 三三二
 傳記法 二九・六六

天才 一一七・三二一
 填充法 三三五
 傳染病的豫防 一七九

ト、ド
 獨逸の兒童學 六五
 頭圍—初生兒の 一四〇 一の發育 一四〇
 統計 二四〇・二五〇 一の典型 二五一 一の發達 二五一
 同情 二二五
 道德心 二七八
 頭部測定器 三九
 頭部の測定 三九
 童話 二五九
 兔唇 一六四

ナ
 内胚葉 九〇
 内部發育力 一三一
 内臟足 一六八

ニ
 二元論 九六

二重意識 三三二
 日本の兒童學 七二
 乳齒の發生 一四二
 乳腺 一六一
 尿 一六二
 妊娠月と胎兒 九三

ネ
 粘膜 一六〇
 腦迴轉 一六四
 腦下垂體 一四八
 腦溝 一五四
 腦髓—の發育 一五四 一の重量 一五六 一の初生兒の 一五四
 能才 一七・三二一
 能動的想像 二五五
 能動的注意 二四六
 囊胚期 九〇
 能力検査の沿革 四〇
 能力練習説 二〇七

四〇六

ハ、バ、ハ
 胚の發生 九〇
 肺結核 一七二
 胚子期 一二
 悖德性性格 三二六
 悖德病 三一八
 バイロロギー 一三
 博識型 二五一
 白痴 一一四・三二三
 發育 八三 一の關する學説 八三 一の痛み 一五〇
 一の原因 八三・八五 一の法則 一三一
 發達 一三二・一八五
 發達記載法 二九
 發達本能 二〇一
 發動的想像 二五五
 發動的注意 二四六・二四八
 發表の性能 一一六
 發問法 三四・七〇
 鳩胸 一六八
 バルロー氏病 一四八

絶近の兒童學 七二
 犯罪兒 三一
 犯罪面相 三二七
 反射運動 一九〇
 反射作用 九八 一の進化 九八
 反射説 一九一
 反射の同情 二二五
 反射的模倣 二〇二
 反對發達法 一八七・二八八
 反對聯合 二四三
 判斷 二七〇
 反應時間 三三八
 反復説 一一一・二〇八

ヒ、ビ、ビ
 比較法 二九・三一
 被教化可能性白痴 三一五
 被教化不可能性白痴 三一五
 鼻腔實扶的里 一七八
 皮脂腺 一六〇
 ヒステリー 一七四・三二二
 ヒステリー性性格 三二二

非染色質 八六・八九
 脾臟 一五九
 筆寫法 三三五
 筆答式實驗 三四
 美的感情 二八五
 泌尿生殖器 一六一
 ビネー法 七五
 ビネー・シモン法 四一
 皮膚 一六〇
 皮膚感覺 二二九
 百日咳 一七六・二七八
 標準錯差 四九
 表出運動 二七四
 表象 二四〇
 表象型 一一七
 病的意志薄弱性性格 三二五
 疲勞 三三二 一の學課 三四六 一の季節 三四五 一の休息 三四八 一の教授 三四二 一の時間 三四三 一の食事 三四八 一の性

別三三九 一の年齢 三三三
 九—と曜日 三四四 一の意義 三三二 一の過度 三四二 一の原因 三三二 一の個性型 三四〇 一の段階 三四〇 一の徴候 三四九 一の法則 三三九 一の臨床的徴候 三三八・三四九

疲勞説 二〇六
 疲勞測定法 三三四

フ、ア、フ
 副甲狀腺 一四八
 腹式呼吸 一五一
 副染色體 一〇四
 佛國の兒童學 六七
 物理學的測定法 四五
 舞踏病 一一四・一七四
 不平 二九五
 不冥兒 一一七
 浮浪本能 二一九
 分解の性能 一一六

四〇七

分解法 一八八
 分割球 九〇
 分割腔 九〇
 文獻法 四一・四二
 文章期 二六七
 憤怒 一九七
 分離期—メンデルの 一〇九
 平均錯差 四八・五五
 平均密度 五三・五四
 並行説 九六
 米國の兒童學 七一
 マーリング氏血清 一七七
 メール法 一一一
 變質性性格 三二八
 變質徵候 三二八
 變質者 一一四
 變成的發達 七
 變成法 一八八
 鞭蟲 一七六
 扁桃腺 一七〇
 鞭毛細胞 八五

ホ、ボ、ポ

- 彷徨癖 二一九
- 方形頭 一六七
- 歩行 一九四
- 保護色 一二〇
- 保護本能 一九二
- 補助筋 一五〇
- 骨の畸形彎曲 一四八
- の形態の變化 一四六
- の生長 一四五
- の生長 一四五
- 障礙 一四八
- 常 一四八・二五〇
- 生 一四五
- 本性的信頼 二八〇
- 本能 九八
- の意義 一九〇
- 傳 一一五
- の起源 一九二
- の進化 九九
- 本能的恐怖 一九五
- 本能的動作 一九〇

- 麻疹 一七六
- 慢性傳染病 一七六
- マンハイム式學級編制法 三一九
- 味覺 一五八・二三〇
- 密度數量の公算錯差 五六
- 脈管 一五三
- 脈搏 一五三
- 脈搏記号 三三八
- 民族童話 二六〇
- 名譽心 二二三
- メンデルの法則 一〇八・二一六
- 朦朧狀態 三三三
- 目的尅雜法 一八七・一八八
- 模倣 二〇二
- 文字抹殺法 三三五
- 約說原理 三・一九・一一九・二

- 一・二・二〇八
- と遊戯 二一一
- の身體の方面 一二三
- の精神の方面 一二二
- の沿革 一二二
- 野生兒 三一二
- 唯心論 九六
- 唯物論 九六
- 有意的模倣 二〇四
- 遊戯 二〇五・二五六・三五一
- と教育 二一三
- 復說 二一三
- 〇九
- 有機感覺 二三四
- 有機的淘汰説 一九二
- 有機的記憶の發生 一〇〇
- 優勝則—メンデルの 一〇八
- 優性—遺傳の 一〇九
- 優生學 一一八
- ユ—と胎教 一一七
- ユ—ゼニクス 同前

- 四〇八
- 用器法 三四・三七
- 養護本能 一九三・二二三
- 幼兒期 一二
- 用不用説 一〇六
- 要目法 三四
- 卵核 八七・八八
- 卵子 八六
- 卵巢の發育 一六二
- 濫産期 二八八
- 理解的好奇 二一七
- 理性的信頼 二八〇
- 理性作用—の進化 一〇〇
- の發生 一〇〇
- 理想—兒童の 七四・二八二
- 律動的發達 七
- 律動法 一八九
- 流行數 五三
- 流行性感同 一七六・一七九
- 倫理的信頼 二八一

ル

- 類似聯合 二四三
- 冷覺 二二九
- レゼプト 二六三
- 劣惡傳傳絶滅法 三三〇
- 劣性—遺傳の 一〇九
- 裂頭條蟲 一七五
- 聯合 二四〇・二四一・二四二・二四三
- 聯合纖維 一五四
- 聯想 二七九
- 連鎖法 一八七
- 老年期 二
- ロイマチス 一六六
- 魯鈍 三一四・三一九
- 論理的記憶 二五三
- ワ、ヱ
- Y染色體 一〇四
- 我儘 一九七・二九三
- ゾロリ氏橋 一五七

第二人名索引

- ア
- アウガスチヌス 九六
- アガツシ 一一二
- アクセル、カイ 三三三
- 足立氏 一六〇
- アリストートル 六一
- イ、キ
- 石川貞吉 二二三
- 伊東氏 一七二
- キルアルムート 三三三
- ウ、ヴ
- ウイニターター 一〇七
- ウイルソン 一〇四
- ウィフエル 六四
- ウエスト 一四七
- ウオルシュ 一七二
- ウオルフ 八四
- ヴント 三五・三六・三七・六九・九六・一八五・一九一
- エ、エ

- エーベル 二一
- エカシエー 六七
- エビキエラス派 九六
- エビングハウス 四一・二七五
- エンゼル 二六七
- オ、ヲ
- オッペンハイム 七一
- カ、ガ、クワ、グワ
- カークパトリック 七一・二六
- カッツイウィツ 一四三
- カッテル 四〇
- カメーレル 九四
- ガルトン 三四・一〇六・一一二・一一七・一一八
- キ、ギ
- ギルバート 三三九
- キング 七一
- ク、ゲ
- グインチリアヌス 六二
- グーツムーツ 二〇六
- クエトリー 一四六

- クスマウル 二二二・二二五
- クラッパイトン 六九
- クラバリード 七三
- クリスマン 一三・一四・一五・六三・三二二
- クリフフォード 九六・一三二・一八七
- クレインライン 三九
- クレゴール 一五一
- クレバリン 四一
- クレラ 一一四
- グロース 三二・七五・二〇七・二三四
- クローストン 八・一〇
- クロットヤーン 一七二
- ケ、グ
- ケムシース 三四〇・三四二・三四五
- ケルシェンシュタイナー 七五
- ゲンツメル 六五・二二〇・二二一・二二三・二二三
- 四〇九

コイタルマン 一四九
 コープ 一〇六
 コムペイレ 六七
 ゴッダード 七四・七五・一一
 七・二八三
 コッホ 六六・三二〇
サ、サ
 榊保三郎 七二・九四・三四七
 サラフオード 七五
 サリ 六八・二八六
 サンディフオード 七三

ジョンソン 八・二〇
 シルレル 二〇五
 シン 三〇・七一
ス、ズ、ツ
 スクワイヤー 一七二
 ステイヴンズ 一〇四
 ストア學派 九六
 ストラツツ 九・一〇・一三四
 スピノーザ 九六
 スペンサー 一〇六・一九一・
 二〇五・二〇六
セ、ゼ
 ゼームス 三五
 ゼルマン 七三

ターナー 一〇六
 高島平三郎 一一・七二・二六
 六
 ダラー 七四・二八二
チ
 チェムパリス 七四・二八二
 チェムパレーン 三二・七一
 チュメル 六六
ツ
 ツエラー 六九
 ツエルニー 三五三
 塚原政次 七二
テ、デ
 テイアマン 九・六三・六四・
 六五・二一七
 テリン 六七・二六三
 デカルト 九六

ト、ド
 ド、フリース 一九二
 外山正一 七二
 トリウベル 六六
 トレシー 七一

四一〇
 ナギー 七四
ネ
 ネットルシツプ 一一三
ハ、バ、パ
 バイグ 二〇〇
 ハックスレー 九六
 バツハ 一一六
 ハルトマン 六九
 ハルピット 一七二
 バルンス 三四・七四・二八二・
 二八三
 ハンス 一一六
 ハンセン 一三三
ヒ、ビ、ビ
 ヒス 八三
 ヒツチツヒ 一一一
 ビネー 三四・四一・六八・七五・
 二二六・二五一・三三九
 ビヤースン、カール 一〇六・
 一一八
 ビヤーン 一七二

ピリングス 一七二
 ビル 七四・二八二
 ビレイルド 一七二
フ、ア、フ
 ファイト 一一六
 ファウンドレル 一五八
 ファーアオルト 六五・一五六・
 一五九
 ファヒテ 九六
 ファウエッヒ 一六二
 フェヒネル 五三・五五・五六・
 六九・九六
 フケヘルムート 七四
 富士川遊 七二
 フツフェル 二二五
 ブラーゼック 三四一・三四二
 ブライエル 三〇・六五・六六・
 六八・一九五・二〇九・二二
 九・二二〇・二三一・二三二・
 二三三・二三五・二三八・二
 六三
 フライシマン 一四三

ブラト 六〇・三三一
 フリードリヒ 三五〇
 フリツチュ 二二
 ブリュゲル 八四
 フレーベル 二四・六二・二二
 一・二三六
 プレッキンリツチ 七五
 フレヒシツヒ 一五七
 フロイド 七四・二二〇
 プローカー 二一

一九五・二二九・二三一
ホ、ボ、ホ
 ホイアネル 一三八・一四一
 ボードキン 七一・九六・一九
 二・二三四
 ボーニー 二二〇
 ホール、スタンレー 一一・二
 五・三四・三五・三六・六八・
 六九・七〇・七一・二二・二
 〇八・二二・二三六
 ボーター 一四六・一四七
 ホールバツハ 九六
 ボロツク 六八
 ボンネー 八三

マ
 マーロー 一四一
 松本孝次郎 七二

ミ
 三島通良 九四・一四一
 ミシュラン 六四・六七
 ミユラー 二一
 ミュールマン 一四八・一五六・

一六二
 ミュンスターベルヒ 三五
ム
 ムーン 一四七
メ
 メー 一六〇
 メンデル 一〇八
モ
 モイマン 二三・四一・七三・三
 四一・三四七
 モツソー 三三二・三三七・三四
 〇
 モット 一一七
 元良勇次郎 七二
 モルガン 一九二
 モンテッソーリ 二五・二二四・
 二三六

ユ
 ユンククラウセン 一七五

ラ
 ライ 二三
 ライシュレ 二〇七

ライプニッツ 九六
 ラスク 二四・七三
 ラツアルス 二〇六
 ラペレー 六二
 ラマルク 一〇六・一九一
 ランツベルゲル 一四七
 ランドア 一五三
 リ
 ヲツケル 一七二
 ル
 ルーソー 二五・六二・六三
 ルーマ 七四
 レ
 レキンスタイン 七四
 レービツシ 六五
 レフレル 一七七
 □
 ローチ 六九
 ローマネス 六八
 ロザノフ 一一七
 ロック 六二・六八
 ロッヰ 六九・九六

ロムプロゾー 三二七

ワ、ヴ

ワーナー 六八

ワース 七三

ワイズマン 八三・一〇五・一

〇六・〇七・一九一

ワイヒャルト 三三七

ワグネル 三四六

—(終)—

大正七年十月二十三日印刷
 大正七年十月二十六日發行

【定 價 金 三 圓】

發行所	論 概 學 童 兒
	付 典
	製 複 許 不
電話番町四二五八番 振替東京二〇九一四番	著 者
	關 寬 之
洛 東京市麴町區 平河町五丁目	發行者
	河本龜之助
洛陽堂印刷所 東京市麴町區榮町二十番地 東京市麴町區榮町二丁目九番地	印刷者
	河本俊三
洛陽堂印刷所	印刷所
	洛陽堂印刷所

圖書目錄

東京市麴町區平河町五丁目三十六番地

洛

陽

堂

電話番町四三五八

振替東京二〇九一四

高島平三郎先生著 (六版)

教育に應用したる 兒童研究

菊判六百頁鐵布製
天金函入索引付
定價參圓參拾錢
郵送料拾貳錢

我國兒童心理學の泰斗高島先生空前の大著にして所説頗る明快幽玄の學理も極めて平易何人も親しく先生の講演に接するの感あり、教育者は固より苟くも兒童を有する家庭は之れに由りて一大寶典を得たり。各種專門學校、中、師範、高等女學校、小學校等教育實際家の好羅針、就中玩具、童話、幼稚園の研究の如きは眞に斯界の珍にして特に前人未發の卓見に饒めり。

內容概略

▲一章兒童と人生 ▲二章兒童の意義 ▲三章兒童の身體 ▲四章嬰兒の心 ▲五章幼兒の心 ▲六章少年少女の心 ▲七章青年處女の心 ▲結論(細項數百節略)

英國ドラマモンド博士原著
高島平三郎先生共譯
山本源之丞先生共譯

(新版)

學校及家庭に於ける 兒童生活の研究

菊判布製天金函入
定價金三圓三拾錢
送料拾二錢

子供を愛する両親や教育家等が常識的に研究したる兒童生活の研究は從來多く著述もせられ翻譯もせられたるが純科學的立脚點より兒童生活を研究したる者は本書以外に未だ是れなし。兒童の本能、習慣、遺傳、發展、感覺、疲勞、興味、繪畫、宗教諸種の缺陷等に關する從來の説は殆んど皆覆へられて、茲に科學的根柢ある新學説は建設せられたるなり。その科學的研究の結晶として生物學的、進化論的、生理學的、醫學的、宗教學的、教育的、社會學的、統計學的、各方面より當今歐米第一流の多數專門大家の科學的研究を集成したるものなり。

內容一斑

▲緒言 ▲兒童研究の豫備 ▲兒童研究上の警戒 ▲生物學と兒童研究 ▲兒童研究の方法 ▲嬰兒研究の方法 ▲兒童の體重と身長 ▲兒童發育上の事實 ▲兒童の感覺及神經系統 ▲兒童の研究 ▲兒童の發展 ▲兒童の疲勞 ▲兒童の道德的特質 ▲宗教と兒童 ▲兒童の興味 ▲兒童の發展 ▲兒童の道德的特質 ▲宗教と兒童 ▲兒童の特異

書 養 修 庭 家 育 教

□ 報 踐 修	□ 夜 半	□ 又 逢	□ 少 女 赤	□ 物 語 案	□ 新 案	□ 信 仰 五	□ 兒 童 保	□ 教 育 期	□ 小 兒 の	□ 動 物 の	□ 忠 實 の	□ 與 様 と	□ 一 日 一 善	□ 修 養 一 日 一 善
報 踐 修	夜 半	又 逢	少 女 赤	物 語 案	新 案	信 仰 五	兒 童 保	教 育 期	小 兒 の	動 物 の	忠 實 の	與 様 と	一 日 一 善	修 養 一 日 一 善
花 田 仲 之 助	上 澤 謙 二	岡 吉 屋 信 子	吉 屋 信 子	若 林 欽	田 村 直 臣	岡 村 準 一	岡 村 準 一	岡 村 準 一	岡 村 準 一	岡 村 準 一	岡 村 準 一	岡 村 準 一	岡 村 準 一	岡 村 準 一
七 〇	四 〇	四 〇	四 〇	五 〇	八 〇	五 〇	二 〇〇	一 〇〇	一 〇〇	五 〇	六 〇	六 〇	二 五	一 五
六	四	六	六	六	六	六	八	八	四	四	四	六	四	二

書 養 修 庭 家 育 教

□ 母 の 小 供 の 心	□ 怒 る な い 働 け 心	□ 女 教 員 の 真 相 及 其 本 領	□ 面 白 き 科 學 の 話	□ 世 界 自 然 科 學 史	□ 修 養 逸 話 の 泉 第 二	□ 精 神 逸 話 の 泉 第 一	□ 精 神 逸 話 の 泉 第 一	□ 兒 童 を 誦 へ る 文 學	□ 家 庭 及 家 庭 教 育	□ 女 の 心 理 百 話 心 理 學 話	□ 心 理 百 話 心 理 學 話	□ 現 代 の 傾 向 と 心 理 學 話	□ 婦 人 の 生 涯	□ 教 育 に 應 じ た る 兒 童 研 究
母 の 小 供 の 心	怒 る な い 働 け 心	女 教 員 の 真 相 及 其 本 領	面 白 き 科 學 の 話	世 界 自 然 科 學 史	修 養 逸 話 の 泉 第 二	精 神 逸 話 の 泉 第 一	精 神 逸 話 の 泉 第 一	兒 童 を 誦 へ る 文 學	家 庭 及 家 庭 教 育	女 の 心 理 百 話 心 理 學 話	心 理 百 話 心 理 學 話	現 代 の 傾 向 と 心 理 學 話	婦 人 の 生 涯	教 育 に 應 じ た る 兒 童 研 究
高 崎 能 樹	嘉 悦 能 樹	後 藤 孝 子	若 林 欽	黒 田 啓 次 郎	同	同	同	同	同	同	同	同	同	高 島 平 三 郎
七 五	一 〇〇	一 〇〇	一 五〇	二 五〇	一 五〇	一 五〇	一 〇〇	一 〇〇	一 〇〇	四 〇	六 〇	八 〇	一 四〇	三 三〇
六	八	八	八	三	八	八	八	八	八	四	六	八	八	三

農 村 教 育 及 娛 樂 書

□倫	□漁	□人	□學校體操の原理及教授	□雙壽人二承、十方舎一丸	□獨逸の國民生活論	□日本農業大志	□日本農業大志	□産業帝國主義	□自然の文	□青農實用	□農家庭教	□青農夜學讀本(前編)	□青農夜學讀本(後編)	書名
木下四郎一	寺岡千代藏	志賀龍湖	向井虎吉	前田貞次郎	給岡徹	宮武徳次	吉田、武居共著	同	榎本卯平	蓮見、野邊共著	同	同	高山秀雄	著者
八〇	四〇	五〇	一、五〇	六〇	一、三〇	七〇	二、五〇	一、〇〇	一、五〇	六〇	三〇	三〇	三〇	定價
八	四	四	三	六	二	八	六	八	八	六	四	四	四	送料

農 村 教 育 及 娛 樂 書

□都	□歐州	□於西に	□泰西に	□地	□人	□小	□軍	□青島から	□田園趣味	□花と人の生	□農家務帳	□農界五大家	□農家業務帳	書名
市	争美談	涙	自	下	生	村	艦	旗	園	季	の	家	稼	帳
よ	り	田	園	へ	痕	談	論	年	郎	て	て	味	園	生
天	野	藤	男	岡	田	次	郎	作	譯	生	江	孝	之	田
渡	邊	喜	三	山	崎	米	三	郎	飲	若	林	同	同	天
野	藤	男	井	上	龜	五	郎	吉	高	橋	立	吉	松	本
一、〇〇	一、〇〇	一、三〇	一、五〇	一、二〇	二、五〇	八〇	一、〇〇	一、〇〇	一、三〇	一、二〇	五〇	五〇	七〇	著者
八	八	三	三	三	三	八	八	八	八	八	四	四	六	定價
八	八	三	三	三	三	八	八	八	八	八	四	四	六	送料

宗 教 及 哲 學 書

書	名	著者	定價	送料
□ 生	命論	永井 潛	四、五〇	三
□ 生	哲學と	同	四、五〇	三
□ 金	剛史(上)	富士川 游	五、五〇	三
□ 日	蘇史(下)	太政官 譯	各三、〇〇	各一、六〇
□ 耶	傳	上澤 謙二	一、五〇	八
□ 宗	人	帆足 理一郎	一、六〇	八
□ 哲	人	同	一、五〇	八
□ 生	秘論	小酒井 光次	一、七〇	八
□ 滅	及人	兒 玉 昌	一、六〇	八
□ 平	類論	藤本 慶 祐	一、二〇	八
□ テ	教	中山 昌 樹	一、二〇	八
□ ダ	生	木下 四郎一	一、二〇	八
□ 新	論	山本 秀 煥	一、五〇	八
□ 哲	學	加藤 一 夫	三、〇〇	四
□ 日	基			
□ 愛	督教			
□ 愛	史			

宗 教 及 哲 學 書

書	名	著者	定價	送料
□ 全	曲(地獄篇)	中山 昌 樹	一、九〇	三
□ 詳	煉獄篇	同	一、九〇	三
□ 同	(天國篇)	同	一、九〇	三
□ 理	上 人	高島 平三郎	一、七〇	三
□ 心	哲 學(ロイス)	鈴木 半三郎	一、三〇	八
□ 忠	の 哲 學(ロイス)	加藤 一 夫	二、〇〇	八
□ 我	を信すべき乎(トルストイ)	同	一、七〇	八
□ 我	何を信すべき乎(トルストイ)	同	一、七〇	八
□ 悲	より歡喜まで	昨上 賢 造	一、二〇	八
□ 生	命の現象	同	一、四〇	八
□ 生	死の現象	竹中 繁次郎	一、三〇	八
□ 生	死の現象	同	一、三〇	八
□ ト	イ 民話集	堀本 弘	一、二〇	八
□ 神	論(ハッロイヨフ)	關竹 三郎	一、二〇	八
□ ア	聖フランチャエスコ	中山 昌 樹	一、八〇	三
□ 子	話(自一月至五月)	田村 直 臣	各四、五	各六

書 術 美 及 藝 文

書	名	著者	定價	送料
□本	然生	加藤一夫	一、〇〇	八
□土	の叫び地の囁き	同	一、五〇	八
□茶	藝復興の三大藝術家話	薄田泣菫	七五	六
□文	世の美	中山昌樹	一、〇〇	八
□近	革	木村莊八	一、七〇	三
□藝	命	同	一、三〇	八
□ゴ	紙	同	一、〇〇	八
□ポ	手	同	一、〇〇	八
□エ	レ	同	八〇	八
□レ	ド	同	一、〇〇	八
□初	夢(畫集)	名越國三郎	一、〇〇	六
□ロ	藝術觀	木村莊八	一、五〇	三
□ロ	の生涯と藝術	渡邊吉治	一、四〇	八
□ヘ	傑作集	吹田順助	一、六〇	三

書 術 美 及 藝 文

書	名	著者	定價	送料
□お	目出度	武者小路實篤	六〇	六
□生	長(感想)	同	一、二〇	八
□心	と	同	一、〇〇	八
□彼	が三十の	同	一、五〇	八
□向	日葵(脚本)	同	一、五〇	八
□後	に來る者(感想)	同	一、六〇	八
□小	さき運命(脚本小説)	同	一、二〇	八
□あ	る青年の夢(脚本)	同	一、四〇	八
□銀	(歌集)	木下利玄	一、〇〇	八
□ノ	ア、ノ	小泉鐵	一、〇〇	八
□スタ	アルコッ	同	一、〇〇	六
□スト	ックホルムの殉教者(同)	同	一、三〇	六
□藝	上の理想主義	赤木桁平	一、三〇	八
□泰	西の繪畫及彫刻(八冊)	洛陽堂編	各冊不同	三

書 術 美 及 藝 文

書	名	著	者	定	價	送	料
□ 文學に現 はれたる	我國民思想の研究	津田	左右吉	三、〇〇			三
□ 同	武士文學の時代	津田	左右吉	三、五〇			三
□ 自然科学者 としての	ゲ	小川	政修	一、〇〇			三
□ ミケル アングエ	ロ	木村	莊八	二、三〇			三
□ ペエト フエンとミ	レエ	加藤	一夫	一、五〇			三
□ 近代音楽家 評傳	(ロマ ン)	尾崎	喜八	一、四〇			三
□ ドスト エフ	スキ	新城	和一	一、三〇			三
□ 留	女の	志賀	直哉	一、〇〇			三
□ 蝙蝠の如	く(小説)	有島	生馬	一、〇〇			三
□ 彼の運	命(小説)	長與	善郎	一、九〇			三
□ 求むる	心(脚本感想)	長與	善郎	一、二〇			三
□ 死の舞	踏(スト ベリヒ)	山本	有三	一、三〇			三
□ 痴人の懺	悔(スト ベリヒ)	木村	莊太	一、六〇			三
□ ハ	評傳	藤浪	山之	一、〇〇			三

252,5

66

終

